

新収資料紹介
「妙法蓮華経 八卷」

資料管理課特別資料室

はじめに

請求番号 八五 三七四三(一―八)

本稿で紹介する『妙法蓮華経 八卷』（以下「本書」）は、早稲田大学図書館が平成十五年十一月の東京古典会主催「古典籍展観大入札会」において落札した資料である。調査したところ、室町時代以前に刊行されたいわゆる古版本であると推定されるに至った。以下その点を中心に若干の書誌的考察を試みたい。

〔書誌〕

妙法蓮華経 八卷

八卷 箱入

装釘 卷子装、金銅製軸頭 卷紐は八巻とも欠失。遺

る六〇ミリ長の断片は平打木綿こげ茶色組編紐。楮斐交漉紙。

版面 紙高一八三ミリ。字高一二二ミリ。行間一二ミリ。一行一七字。

表紙 黄褐色ぼたん紋緞子布地。巻一は布地が欠失。

見返し 濃紺紙

題簽 書題簽。巻二、八のみ現存。巻二「妙法蓮華経 卷第二」、巻八「妙法蓮華経卷第三」と墨書。

刊記 各巻末に「法華妙典之板木堺南庄石屋町之住経

師屋有之石部神三良永清」とある。

印記 各巻末の刊記の後に「寶□福有」「永清」（朱印）

箱 黒塗箱。全体に窮屈で、原箱とはみなしがたい。

蓋表に貼紙があり刊記と同じ文言が墨書され、さらに「貞観三年刊」と記されている。

その他 全八巻にわたって巻首部分に虫損がみられる。

また、巻二の第一六、一七、一八、一九紙がそれぞれ離れている。

内容と構成について

「法華経」は大乗仏教經典の一つで、ふつう鳩摩羅什が漢訳したもの（妙法蓮華経）のことをいう。聖徳太子撰といわれる『法華義疏』などもあるように、わが国において法華経の受容の歴史は古く、天台宗および日蓮宗では最高經典の位置を与えられていたことは知られるとおりである。

法華経はわが国においても比較的早くから版行されていた。兜木正亨『法華版経の研究』（京都 平楽寺書店 一

九五四）によれば、わが国法華経の版本は、鎌倉時代開版の春日版に代表される。その主な特徴としては、次のような点があげられる。

①調卷は二八品を八巻に分けるのがわが国の通例である。

②全八巻のうち、巻一には刻記がないが、巻二から巻八まで巻頭の品題の下に二から八の調卷番号を持つ。

③各巻巻末に「妙法蓮華経巻一―巻八」の尾題を刻記する。

本書を確認すると、右の特徴をすべて備えた内容である。本書各巻の内容と構成は左記の通りである。

巻一（妙法蓮華経序品第一・妙法蓮華経方便品第二）

巻二（妙法蓮華経譬喻品第三・妙法蓮華経信解品第

四）

巻三（妙法蓮華経藥草喻品第五・妙法蓮華経授記品第

六・妙法蓮華経化城喻品第七）

巻四（妙法蓮華経五百弟子受記品第八・妙法蓮華経授学無学人記品第九・妙法蓮華経法師品第十・妙法蓮

華經見寶塔品第十一)

卷五(妙法蓮華經提婆達多品第十二・妙法蓮華經勸持品第十三・妙法蓮華經安樂行品第十四・妙法蓮華經從地涌出品第十五)

卷六(妙法蓮華經如來壽量品第十六・妙法蓮華經分別功德品第十七・妙法蓮華經隨喜功德品第十八・妙法蓮華經法師功德品第十九)

卷七(妙法蓮華經常不輕菩薩品第二十・妙法蓮華經如來神力品第二十一・妙法蓮華經囑累品第二十二・妙法蓮華經藥王菩薩本事品二十三・妙法蓮華經妙音菩薩品第二十四)

卷八(妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五・妙法蓮華經陀羅尼品第二十六・妙法蓮華經妙莊嚴王本事品第二十七・妙法蓮華經普賢菩薩勸發品第二十八)

紙数と紙の長さ

全八巻の紙数と紙の長さは、巻一(二五紙)(六四七一ミリ)、巻二(二二紙)(七五一七ミリ)、巻三(一九紙)(七〇

新収資料紹介「妙法蓮華經 八巻」

八一ミリ)、巻四(一四紙)(六二二四ミリ)、巻五(二四紙)(六七三三)、巻六(一七紙)(六五八九ミリ)、巻七(一六紙)(六一八〇ミリ)、巻八(一三紙)(五三五八ミリ)である。

各巻の紙数は、一三紙から二一紙と一定しない。各巻の全長は平均で六五一七、九ミリである。紙数が一定しない主たる要因は紙の長さにはらつきが顕著であることによると思われる。全八巻それぞれの紙長は左記のようである。(単位…ミリメートル)

巻一 六二七、六五六、六三七、一〇、六五五、六五五、五八〇、七四、五六四、五四九、一〇三、九〇、五四五、一〇六、六二〇余

巻二 六一〇、四七、五六五、六四、六〇四、一八、六二五、八、六二〇、八四、五三五、六七、六五五、五二四、一二六、六五三、四七二、二〇三、二七三、一五四、六一〇余

巻三 六〇五、五二、五七〇、五〇、四〇、六二〇、五五二、一〇一、四三〇、一八三、二六四、三九〇、六五三、六二四、三九、六五三、五七〇、八〇、六

一五余

卷四 六四五、六四五、六五五、六五四、六五六、四
三五、一二〇、六五四、三六二、二六〇、三二四、
三三八、一三六、二四〇余

卷五 六四五、六四三、二〇、六六〇、六五五、六五
八、六六〇、六六〇、四二五、二三四、三六一、二
六五、六五七、一九〇余

卷六 三六四、二七〇、六六〇、七五、六〇四、六六
〇、二四、六三八、一一、五八五、五〇、五八五、
二二、六三〇、六四八、一〇四余

卷七 六四〇、六五〇、六〇五、四五、五八四、六八、
六五〇、六五〇、四五五、六三、一四〇、四九〇、
一六五、四六五、一九〇、二四五、七五余

卷八 六四四、六五五、六五四、六五四、六五四、四
四一、一三八、七五、一七五、四七八、一五〇、五
〇〇、一四〇余

一紙六五〇ミリ前後といえるが、全巻にわたって紙の
長短が甚だしい。全巻とも最終紙は巻軸部分の測定がむ

ずかしい。

一紙一〇〇ミリ以下の長さのものが二三枚ある。特に
一〇ミリ（巻二）、八ミリ（巻二）、一一ミリ（巻六）とき
わめて短い箇所がある。

刷りの状態について

本書は各巻末の刊記部分と「妙法蓮華經」の經文本文
との印刷の状態が一見して異なっている。刊記部分は刻
字が明瞭で、墨色も濃い。これに反し、經文本文の刻字
は明瞭とはいえず、全体にわたって真横に版木の断裂が
認められ、天地に汚染がある。

このような状態となった一因として版木が古いことが
考えられる。使用された版木がけつして良い状態でな
かったであろうことは、刷りの悪い箇所があったり、う
まく刷れなかったのでやり直しをして、紙継ぎをした部
分が目立つところからも容易に推定される。

巻一の例

●序品第一の二、三紙目

「入於深山 思惟佛道 又見離欲 常處空閑」の一

行は二枚の紙の継ぎ目に印刷されているが細い短冊状の紙を貼り継いだ上に印刷された状態になっている。

●四紙目は一〇ミリの幅の紙に「佛皆同一字号日月燈明又同一姓姓頗羅」の一行が刷られ前後の行との字間が平均より短い。

●七紙目、「今」「疑」「究」「竟」の字形が不十分な状態で刷られている。

●九紙目、最初の「過去諸佛以無量」の文字が、続く「無数方便種種因緣譬喩」の文字や他の文字より字形が大きい。

●一〇、一一、一二、一三紙目は互いに高さが上下している。

●一三枚目の文字は字が滲んだり、縮んだりして読みづらい。

全体として、本書は一度で刷り上げられたものではなく、刷りなおし、料紙の貼りなおしが何度も行われたと考えられる。

若干の考察

- 本書は、兜木正亨『法華版経の研究』で紹介されている春日版法華経のうち、奈良県興福寺所蔵の貞和五年（一三四九）の年記を持つ観妙奥書本法華経に字高、行間が近似している。観妙奥書本は総持版の覆刻別版で、総持版の覆刻は室町時代に四種の別版がある。観妙本と同版の版式初出の現存版は正応五年（一二九二）開版本で、この版式の本は中型本として最も多く流布しているという。以下本書と観妙奥書本（以下「観妙本」、奈良国立文化財研究所蔵の写真版を参照）を比較して両書の特徴を指摘する。
- 観妙本の方が字の線が明確に出ており、本書は全体に字の線が細い。
 - 両書とも字体は似ていると言えるが、同じではない。
 - 本書は所々で字がふやけたように大きくなっている箇所があるが、観妙本は字の大きさが全体に一貫している。
 - 字の並び具合が特徴的な箇所両書でよく似ている場合がある。

●調巻の数字の位置が両書で異なっている箇所がある。

●本書巻一の九紙と一〇紙の間にあるべき「言辭而為衆生演說諸法是法皆為一佛乘」から七行分は原典に照らしめて一二紙目に貼りまちがえられている。観妙本は原典に即している。

●両書は同版ではないが観妙本と同一系統の本を覆刻したのが本書である可能性がある。

本書の刊記には「法華妙典之板木堺南庄石屋町之住経師屋有之石部神三良永清」とあり、本書の刊行者は石部神三良永清と名乗ったことがわかる。

「経師屋」ともあるが、経師屋の語は『日葡辞書』（一六〇三成立）に「経開き、拵え、綴づる家、印刷所、または本屋」とあり、印刷製本業者を意味した。

石部神三良は天正二年（一五七四）に『四体千文書法』を、天正十八年（一五九〇）に『節用集』を刊行した石部了冊と同一人物か、もしくは縁戚の人物ではないかと考えられる。東洋文庫蔵『四体千文書法』の刊記に「此板

泉州大鳥郡堺南庄有石屋町住石部了冊入道新刊巧極妙字迫真奇哉時天正二年六月吉辰 宿蘆齋書焉（印「瑞超」）とあり、同じく『節用集』の刊記に「右此板木者泉州大鳥郡堺南庄石屋町経師屋有是石部了冊（印「永清」）于時天正十八年（庚寅）履端吉辰」とある。

石部神三良の住んだ石屋町は天文四年（一五三五）の『念仏差帳』に出る町名で中之町中浜の本名であった。大道筋を隔てて武野紹鴎等が住んだ舳松町があった。

石部了冊は『節用集』の刊記でも板木を持っていたとある。石部氏は開版事業に志を寄せた一族で、同じく堺の住民で『医書大全』『三体詩』『論語』の出版刊行にかかわった阿佐井野氏に続いた人々といえるかもしれない。

（文責・久保尾俊郎／松下真也）

前号訂正

訂正箇所		誤		正	
82頁17行	北野天満宮	北野天満宮	大阪天満宮	北野天満宮	大阪天満宮
82頁18行	北野天満宮	北野天満宮	大阪天満宮	北野天満宮	大阪天満宮